

『信濃國 北向堂 厄除千手觀世音畧縁起』について
——解説並びに翻刻——

稲垣泰一

〔解説〕

一

架蔵の『信濃國北向堂 厄除千手觀世音畧縁起』（無刊記、版本）一冊について、簡略な解説とともに、翻刻を付して紹介することとする。

まず書誌を記しておく。

江戸時代末期の無刊記、版本一冊。縦二十五・三糎、横十五・五糎。料紙は楮紙。袋綴。仮綴。表紙、裏表紙とも本文共紙。全十丁（表紙、裏表紙を含む）。本文は一面九行。漢字、平仮名交り文で、漢字には大半、平仮名の振り仮名を施す。表紙（表）中央に、『信濃國北向堂 厄除千手觀世音畧縁起」と外題を刷る。柱刻は本文料紙下方に、丁付（二～八）を印刷。表紙

（見返し）には、月並御祈禱護摩供、四節御祈禱護摩供、大般若經転読の月日を印刷。また、裏表紙（表）には、大悲尊、八王子権現それぞれの縁起の月日を印刷する。

なお、裏表紙（見返し）の本文末尾に見られる「本記」、及び裏表紙（表）の末尾部分にある「本ゑん起」は、角川日本地名大辞典『長野県』（角川書店）の「常楽寺」の項に引用される『北向山厄除觀世音菩薩縁起』、または、日本歴史地名大系『長野県の地名』の「常楽寺」の項引用の『北向山觀世音由来』（常楽寺蔵）などを指すものかと考えられるが、両書とも未見。

本書は長野県上田市別所温泉に所在する北向觀音堂（本尊は千手觀音）の略縁起である。北向觀音堂の創建

由来とその本坊である常樂寺、及び周辺の長樂寺、安樂寺（三樂寺と呼称される）の建立や伽藍の整備、消長、變転の経緯などを記す。また、平維茂が千手觀音の加護によって、戸隠山の活鬼（紅葉）を退治する説話伝承も記している。

次に、本書の梗概（粗筋と展開）を順を追って以下に掲げる。

① 冒頭に内題がある。続いて、対句仕立ての美文で、觀音菩薩の大悲は深く、万物を救うこと、また、一心に称名して、二世の悟りを願うべきことを説く。次に、当山厄除千手觀世音菩薩の由来をたずねると、以下の通りであるとする。

③ 人皇五十三代淳和天皇の御宇天長二年に、信濃国小県郡山浦の郷の山下の地に光明が立ちのぼり、同年六月に大坑が現れた。

④ 火煙が吹き出し、人馬諸畜の多くが死んだ。そこで守護が都に上り、天皇にこの事を奏聞する。天皇は利生安民のため、円仁（比叡山の座主、慈覚大師）に勅命を下した。

⑤ 円仁はこの地にやって来て、火坑の辺りに壇場を設け、台密の秘法を修した。すると、七日目の十

月二十五日に坑火が消滅し、坑中からは薬師如来、觀世音が紫雲に乗って出現した。そして南方に飛行して、北面の山下の桂の樹上に一寸八分の紫金の觀世音が止まり、薬師如来は同じく山頂の石上に立った。

⑥ その夜、大師の夢に菩薩が現れ、大師に次のように告げた。私は火坑出現の觀音薩埵である。衆生を済度し、天下静謐、国家豊饒を守るためこの地に出現しようと、汝を待っていたのである。今、私が止まっている所は勝地なので、私の像を北向に安置せよ。北向にすることは北斗の千載に等しく、寿命長大を守るためである。信心堅固で、一度でも参詣する者は、現世では厄難を除き、未来は成仏させよう。また、薬師如来も私と共に、衆生の病苦を救うために出現したのである。

⑦ この地は神代より多くの温泉が湧出し、長く繁栄したので、行基が瑠璃殿、並びに長樂寺、常樂寺、安樂寺を建立した。しかし、水火兵乱の変により、寺跡もなくなり、温泉も土中、砂石の下にくぐり、その源も不明になってしまった。そこで、薬師仏と私の神通力をもってその源を知らしめよう。また、火坑には石鏡がある。これは閻王より送ら

れたものである。衆生がこの鏡に向かうと、その善惡の機縁に随って、六道四生の形体を見ることになるのである。こう告げると、観音菩薩は南方に飛び去った。

- ⑨ 大師は夢から覚め、奇異の思いを感じて火坑を見ると、一体六面の鏡石があった。それを取り上げると、そこに数万の仏体を拝した。

- ⑩ 以上の事の有様を、急いで禁中に奉聞したところ、天皇は感嘆して、大師に勅して寺院を建立させた。大師は仮殿に二尊を移し、良木、工匠を選んで、大悲殿を北面に造立し、大悲殿より乾の方（北西）に、長樂寺を建立した。

- ⑪ 紫金の尊像が止まった桂樹を用いて、千手観音像を彫刻し、火坑出現の尊像を胎中に安置した。天長三年十月二十五日に造立供養したので、毎年十月二十五日を大縁日としたのである。また、「北向山」と淳和天皇が勅額を記し、一千貫文の地を寄附した。以来靈驗あらたかである。

- ⑫ 薬師如来は、最初に止まった山頂に瑠璃殿を建立して安置したので、峯の薬師と称した。
- ⑬ 次に、神祠を造営し、日吉山王の八王子権現を勧請した。

- ⑮ この神は、天神七代の二代目国挾槌尊で、崇神天皇の御宇、八人の王子を引率して降臨したので、八王子権現という。また、千手観音の本地垂迹の神であるので、北向山の守護神としたのである。

- ⑯ また、二尊が出現した壙上に宝塔を建て、金銀泥の一切経を書写して納め、常樂寺を建立して宝塔守護の寺とした。更に、安樂寺を造立して釈迦如来を安置した。つまり、台・密・禪を表わして、三樂寺は鼎足の如くであった。

- ⑰ この地の南方の山麓に温泉が所々に湧出したが、いずれも北方に向かっていた。中でも七ヶ所の温泉が勝れていたので、薬師の七つの名をもって名号とし、惣名を七久里の湯と名付けた。

- ⑱ 大師が疲労の時、大悲殿の前の温泉に入ると、効驗があった（大師湯がこれである）。

- ⑲ 石鏡は北向堂の傍に鏡台をすえ、諸人に見せた。参詣の貴賤は自分の六道の形体を見て、嘆き悲しんだので、僧が鏡を権現の池の中に投げ入れた。それよりこの池を鏡ヶ池と名号した。

- ⑳ 人皇五十六代清和天皇は靈夢を感じ、深く帰依して大悲殿、常樂寺の山内、火坑の宝塔を修補した。また、二十五歳の時、大悲殿の山門に「長樂寺」

と宸筆の額をかけさせ、新たに長樂寺、安樂寺の山内に宝塔を営み、次に観音院、蓮花院、西尊院、明星院の四院を建立した。また、慈覚大師の四人

②1

②6

の弟子を住僧として、一千貫文の地を寄附した。人皇六十三代冷泉院の御宇安和二年、戸隠山に活鬼〈紅葉〉という妖賊がいて、人民を大いに悩ま

②2

②7

した。天皇はこれを聞き、急いで退治すべき旨、信濃守平惟茂に宣旨を下した。

②3

②8

惟茂は出陣に及んで、自分は兵馬の職権にあるが、神の擁護がなければ、容易に退治することはでき

②4

②9

まい、出浦の千手観音は厄除の尊像で靈驗あらたかである、祈誓しようと、次のように願書した。

②5

③0

大悲の加護によって妖賊を退治することができたならば、堂宇を前に倍して再建しよう。願はくは力を添えて、人民の嘆きを救って下され。

②6

③1

心をこめて参籠し、その後、官軍は列を正して出発した。不思議なことに、戸隠山に至ると、惟茂の髻頭に、千手観音が紫雲に乗って現れた。八王子権現も手に弓箭をたずさえて現れ、惟茂と共に妖賊に矢を放った。

②7

③2

御利益著しく、難なく妖賊を討ったので、活鬼へ紅葉の魂魄は大天狗、小天狗と形を変え、八丈

坊、九丈坊と名乗り、今より八王子権現の眷属となつて、北向山を守護しようと誓い、雲中に入つて南方へ去った。

惟茂は大悲の靈感を骨身に感じ、「観音の慈悲の力をこれもちて活鬼をうつてこゝろ安くに」と詠じた。

天皇は惟茂が賊徒を滅ぼしたことを聞いて感激し、惟茂に本領信濃に加えて、甲斐、越後を賜つて、三国の太守とし、將軍に任じた。この時から、平將軍平惟茂と称したのである。

惟茂は大いに喜び、信濃国に帰り、まず当山の観音に参拝し、信心いよいよ肝に銘じた。また、誓文の通りに工匠を集めて、大悲殿、八王子権現の祠、瑠璃殿、山門、三ヶ所の宝塔、三樂寺、四院に至るまで、残るところなく再建した。また、新たに、六十坊を建立して支坊としたので、七堂伽藍の靈場を三樂四院六十坊と称した。

塩田三千貫文の地は二千貫文は淳和帝、清和帝が寄附したので、天皇は残り一千貫文の地を寄附した。そして、都合塩田三千貫文の地を残らず当山領とした。

また、惟茂公はこの里に別業を造営して、別所と

呼んでいた。それよりこれを里の名としたのである。

二

- ③① 人皇八十一代安徳天皇の御宇、木曾義仲が放火し、三楽四院六十坊、世々の御璽紙まで、残らず焼亡したが、大悲殿と安楽寺の宝塔のみ回禄しなかった。右大將頼朝公の治世の時、海野氏が当山の来由を言上したところ、大悲殿、諸堂が再建された。続いて三楽寺が再建される予定であったが、成されなかった。

- ③③ その後、執権北条家が諸堂を修補し、大悲殿を長楽寺とし、次に常楽寺、安楽寺を再建したので、また三楽寺は鼎足の如くであった。

- ③④ 中興別当、常楽寺堅者の性筭が大勸進し、金銀泥の一切経を書写した。これを弘長二年中に、中興二世、阿闍梨頼真が二尊が出現した坑中に納めて、宝塔を再建した。

- ③⑤ このような霊地であるので、一度でも歩を運び、一心に称名すれば、大悲の御誓願の通り、悉く厄難を除き、願がかなわぬものはないのである。くわしくは本記につまびらかである。

- ③⑥ 以上、少々長くなったが、本書の梗概を①～③⑥に列記した。

本略縁起は長野県上田市別所温泉にある、厄除観音として名高い北向千手観音堂について記している。北向観音堂は別所温泉の中心地にある。北陸新幹線の、上田駅から、上田電鉄別所線で別所温泉下車、徒歩数分の地である。

別所温泉は上田盆地の南部、標高六百メートルの塩田平の西南端に位置する。清少納言の『枕草子』（能因本）に、「湯はななくりの湯。有馬の湯。玉造の湯」とある。「ななくりの湯」はこの別所温泉を指すという（梗概⑪）。また、「別所」の地名は、平維茂がこの地に別業（別荘の意）を造営したことに由来する（梗概③⑩）。

北向観音堂は平安時代初期天長三年（八二六）、比叡山延暦寺の第三代座主慈覚大師円仁によって創建された（梗概④～⑫）。本尊は千手観音像で、天長二年（八二五）に火坑から出現した観音菩薩の尊像を胎内に納め、北向に安置したのでこの堂名がある（梗概⑪⑫）。また、北の彼方には有名な善光寺があり、その本尊阿弥陀仏と相對しているという。

この地には、北向観音堂を所管する常楽寺がある。慈

覚大師円仁による建立で、国重要文化財の石造多宝塔がある。この地域は鎌倉時代以来「信州の学海」と称されたが、常楽寺は台密教学の中核であった。また、天長年間（八二四～八三四）創建の安楽寺には、壮麗な国宝の木造八角三重塔が現存する。現在は廃寺となった長楽寺もあって、合わせて三楽寺と呼称された（梗概⑪⑬）。

六十三代冷泉天皇の御宇安和二年（九六九）、戸隠山に活鬼（紅葉）という妖賊が現れ、人民を大いに苦しめた。平維茂は勅命を受け、この北向観音堂の千手観音に祈願して、これを退治した。その後、活鬼の魂魄は北向千手観音の守護神になったという（梗概②⑤⑥）。平維茂は信濃・甲斐・越後の三国を治める将軍に任ぜられ、平将軍惟茂と称した。維茂は七堂伽藍を整備し、この地は三楽四院六十坊と称されて繁栄した（梗概②⑦⑧）。

この活鬼退治の説話伝承は、観世小次郎信光作の謡曲「紅葉狩」に脚色されて、広く人口に膾炙するものと同じ伝承である。ただし、謡曲では、平維茂は八幡大菩薩を心に念じて刀を授かり、鬼女（紅葉）を切り殺すという展開である。なお、北向観音堂に向かう途中に、惟茂塚という古墳（平維茂の墓といわれる）がある。

また、安徳天皇の御宇、木曾義仲の放火により、この地の伽藍の大半が焼失するが、この北向観音堂と安楽寺

の宝塔のみが回禄を免れた（梗概③④）。その後、右大將源頼朝の時、諸堂が再建され、執権北条家が諸堂を修補し、三楽寺が再建されて復興する（梗概③②③③）。

この別所温泉は温泉の湧出量が豊富で、大師湯（慈覚大師円仁が入湯、梗概⑩）、大湯（木曾義仲が愛妾葵御前と入湯、「葵の湯」とも）、石湯（真田幸村の隠し湯という）などの外湯（共同浴場）がある。疲労回復、外傷、胃腸病、神経痛、リュウマチなどに効能があるという。それ故、江戸時代以来多くの文人墨客に愛された。温泉街には品格ある温泉宿が並び立ち、大正時代から昭和にかけて、川端康成、北原白秋、有島武郎などの作家が訪れている。

（注）

（1）『枕草子』の本文は新編日本古典文学全集『枕草子』（小学館）一二七段による。なお、「七栗の湯」として、三重県津市の榊原温泉とする説もある。

〔翻刻〕

凡例

一、本文（漢字、平仮名）、及び振り仮名（平仮名）はすべて原文通りとした。

一、字体は基本的に通行字体を用いた。漢字の異体字、俗字体、略字体などは正字体に改めた。

𠂔↓靈 𡗗↓喜 吳↓異

𠂔↓体 𡗗↓事 𠂔↓より

一、慣用のくずし字については、次の通りとした。

𠂔↓給 𡗗↓也 𠂔↓事

一、旧字体はおおむね新字体（常用漢字体）に改めた。

觀↓觀 國↓国 聲↓声 當↓当

一、次の仮名は平仮名とした。

ツ↓つ ニ↓に ハ↓は

ミ↓み ヤ↓や

- 一、漢文訓点符号の一・二、レ点などはそのままとした。
- 一、漢文訓点文の送り仮名は片仮名とした。
- 一、丁替り、表・裏は、丁数、オ・ウの順で、毎半丁末尾に次のように示した。
 - 「(三オ) 「(五ウ)
- 一、読解の便を考えて、本文に適宜読点(、)を施した。

信濃国 北向堂 厄除千手観世音略縁起 (外題 中央)

「(表紙 表)

月並御祈禱護摩供 毎月十七日巳刻

四節御祈禱護摩供 正月十七日 五月十七日

九月十七日 十二月十七日

大般若経転読

毎年四月朔日

「(表紙 見返し)

信濃国北向堂厄除千手観世音略縁起 (内題)

それぐせいじんくほう
夫弘誓深広にして、恰も滄海のごとし、利濟運載、殆ど舟航に似たり、観其音声の大悲は洩すか
たなく、群機をすくひ玉へば、花に啼鶯、水にすむ蛙の声迄も、皆得解脱の因縁となりなん、い
かにいはんや人たる身は、一心称名して、二世の悉地を求め願はしけれ、

抑、当山厄除千手観世音菩薩の由来をたづぬるに、人皇五十三代淳和天皇の御宇天長二乙巳の年、
信濃国小県郡出浦の郷東面の山下に、草木鬱々として「(一オ) 平かなる地あり、夜なく、光明
たちのぼりければ、諸人あやしみけるに、同年六月に至り、俄に大坑あらはれ、日を重るに随ひ

火煙吹出し、其けふりのなびく方、人馬諸畜に至る迄、悉く斃する事数をしらず、里民大に恐懼して、四方に散乱す、時の守護職都に登り、叡聞に達せしかば、天文の博士に考へさせたまふに、靈仏現じ給わん奇瑞ならんと奏す、因テ茲ニ利世安民のため、円仁に勅命ある、是比叡山の座主慈覺大師御事、大師則此地に下り玉ひ、火坑の辺りに「(一ウ) 壇場を設け、一七日の間、台密の秘法修行し玉ひける、大師誠実加持の験徳著く、第七日目十月廿五日に至り、坑火消滅し、坑中より薬師如来、觀世音紫雲に乘じ出現し玉ひ、南方へ飛行し、北面の山下桂の樹上に、一寸八分紫金の觀世音止り給ふ、薬師如来も同しく、山頂の石上にたゞせ玉ひける、其夜大師まどろみたまふに、異香ふんくとして菩薩現じ給ひ、大師に告給はく、我は是火坑出現の觀音薩埵なり、国中の人民仏神に帰依する事うすく、現世は邪曲に長じ、未来は「(二オ) 地獄に墮せん事を悲しみ、衆生を済度し、天下静謐、国家豊饒を守らん為、此地に出現せんと、汝を待事年久し、今汝が法味に預り歡喜踊躍せり、即今我止る処最上の勝地なるが故、我像を北面に安置すべし、我北に向はん事は北斗の千載にひとしく、寿命長久を守らんためなれば、信心堅固にして、ひとたび歩を運ぶ輩は、現世は厄難を除き、諸願を満足せしめ、未来はことく成仏なさしめん、薬師如来も我とともに、衆生の病苦を救わんと出現したまひしなり、」(二ウ) 此地に神代より数多の温泉湧出して、長く繁栄しければ、行基瑠璃殿并に、長樂寺、常樂寺、安樂寺を建立せしが、

水火兵乱等の変にかゝり、寺跡もさだかならず、温泉も土中砂石の下をくぐり、河水に交りければ、久しく其みなもとをしるものなし、薬師如来とわが神通力をもつて、其源をしらしめん、又火坑くわけうに石鏡あり、これは閻王えんわうよりの送りものなり、衆生此かゞみに向はゝ、善惡の機縁きえんに随ひしたが、六道四生の形体ありさまを見んと告終り、又南方へ飛去り玉ふ、大師夢覺さめ、奇異の思ひをなし」(三才)火坑を見玉へは、壺体六面の鏡石あり、取揚させみ給ふに、数万の仏体を拝し玉ひしと也、是即大師徳行の宿縁ならんか、事の趣を急ぎ禁中へ奏聞ありければ、天皇叡感浅からず、大師に勅はさして梵閣ぼんかくを宮いとなみたまふ、大師仮殿かりでんへ二尊を移し、良木工匠を撰み、大悲殿を北面に造宮ぞうきし、大悲殿より乾いぬぬの方に長樂寺を建立し給ふ、且紫金の尊像止り給ふ桂樹をもつて、千手尊の像を彫刻てうこくし玉ひ、火坑出現の尊像を胎中たいちゆうに安置し、出現し玉ふ月日に随ひ、天長三丙年十月廿五日、造立ぞうりう」(三ウ) 供養なし給ひければ、毎年十月二十五日大縁日とはなれり、則北向山ほつちやうざんと淳和帝勅額ちやくよくぐくをなし玉ひ、一千貫文の地奇附し玉ふ、しかしより已来このかた、響ひびの音に応おずるごとく、靈驗れいげん異に新あらたなり、薬師如来をば、初め止りたまふ山頂に瑠璃殿を建立し、安置し玉ひければ、峯の薬師と称す、次に神祠を造宮たいうきし、台宗擁護江州坂本日吉山王のうち、八王子権現を移し勸請し給ふ、此御神は天神七代の第二代目国挾くわい槌尊ちのすにして、崇神天皇の御宇、八人の王子を引率し、近江国滋賀降臨しがにぞうりん」(四オ) し玉ひし故、八王子権現と崇あがむ、是則千手観音と本地垂跡すいしやくの神にましますなれ

は、北向山守護神となし給ふ、又二尊出現し給ふ壙上に宝塔を経営し、大師を始、諸山の碩徳来集し給ひ、金銀泥の一切経を書写し、宝塔へ納め、常樂寺を建立し、宝塔守護の寺となし、安樂寺を造立して釈迦如来を安置し、台密禪に表して三樂寺鼎足の如し、然るに、此地南方の山麓に、忽然と温泉所々に湧出しけるが、いづれも北方に向ひ湧出ること、大悲の示現空しからず、中にも」(四ウ)七ヶ所の温泉勝れたりければ、薬師の七名をもつて一々名号給ひ、惣名をば古しへに随ひ、七久里の湯となづけたまふ、大師御いたはりの時ありて、大悲殿の前なる温泉に入らせ給ふに、其効験を得玉ふこと速なりしとかや、則^{大師湯}、石鏡は北向堂の傍に鏡台をすへ、諸人に見せしめ玉ふに、参詣の貴賤鏡面に向ひ、善惡の感見によつて六道の形体を現じければ、諸人石鏡に向ひ、歎き悲しむ声聞にしのびす、ある僧權現の池中へなげ入しとなん、夫より此池を」(五オ)鏡が池と名号しとかや、

人皇五十六代清和天皇ある夜靈夢を感じたまひ、当山を御歸依ふかく、大悲殿并に常樂寺の山内、火坑の宝塔を修補したまひ、宝筭二十五にならせ給ふ時、大悲殿の山門に長樂寺と宸筆の額をかけさせ、新に長樂寺、安樂寺山内に宝塔を営みたまひ、次に觀音院、蓮花院、西尊院、明星院の四院を建立し、慈覺大師の弟子四人をうつし、住僧となしたまふ、此御宇」(五ウ)老千貫文の地、万の料に寄附し給ひしなり、

人皇六十三代冷泉院の御宇安和二年、当国戸隱山に活鬼紅葉といへる妖賊あつて、人民を悩ます事大方ならず、民是を歎き、其旨　皇聴に達せしかは、急ぎ退治すべき旨、信濃国守平の惟茂に宣旨を下し給ふ、しかる間、出陳として三軍の武備鄭重なり、惟茂の玉ひけるは、我兵馬の權に職すといへども、必仏神の擁護に預らすんは、容易に退治する事を得んや、殊更今年色々の厄難にあたる、幸ひ出浦の千手觀世音（六オ）は厄除の尊像にて、靈驗あらたなり、祈誓せんと願書し玉ひけるは、惟茂不肖なりといへども、勅命黙止がたし、大悲の加護に預り、此たび妖賊退治せは、堂宇前に倍して再建したてまつらん、願はくは不日に治平の力を添へ、人民の歎きを救ひ給へと、抽二丹誠一參籠し給ひ、其後官軍列を正して発向ある、不思議や戸隱山に至り給ふと、惟茂の髻頭に千手觀音紫雲に乗じ、光りを放つて現じ給ふ、日吉八王子権現も御手に弓箭を携へ、雲中に現し、惟茂と共に妖賊に矢を（六ウ）放ちたまふ、誠に心念不空の御利益著く、なんなく妖賊を討留たまへは、活鬼紅葉の魂魄、大天狗小天狗と形をかへ、八丈坊九丈坊と名のり、今より八王子権現の眷属となり、北向山を守護し、厄除觀世音、日吉八王子権現に帰依するものをは、我も共にこれを守り、諸願を成就なさしめんと誓ひて、觀音、日吉の権現にしたかひ、雲中に入南方へ飛去りぬ、官軍皆々奇異の思ひをなしにける、惟茂大悲の靈感骨髓に徹し、

觀音の慈悲の力をこれもちて活鬼をうつてこゝろ安くに

と詠す、」(七オ) 惟茂たやす輒たやすく賊徒ぞくしを亡ほろせし事、

天聴に達せしかは、帝叡慮うるはしく、本領信

濃に増加して、甲斐、越後を賜りて、三ヶ国の太守となし、其上被レ任セ將軍ニ、此時より平

將軍惟茂公と申なり、恩賞眉目の折なれは、身のうれしさを直垂ひたれの袖に包みて、本領信濃にかへ

らせ、先当山の観音へ参拝し玉ひ、信心弥肝にめいし、不違二誓文一一直たゞちに工匠を集、大悲殿井に、

八王子権現の祠、其外瑠璃殿、山門、三ヶ所の宝塔、三樂寺、四院に至るまで、莊嚴しやうこんぎ魏々として、

残る方なく再建し玉ひ、新に六十坊を建立し、支坊と」(七ウ) なし玉ひければ、七堂伽藍の靈

場にて、三樂四院六十坊と称す、しかるに塩田三千貫文の地、二千貫文地は淳和帝、清和帝奇附

し玉ひければ、残り一千貫文地寄附し玉ひ、都合塩田三千貫文の地、不殘当山領となし給ふ、猶

又、惟茂公この里に別業べつげうを造営し、別所と呼玉ひしより、里の名とす、

人皇八十一代安徳天皇の御宇、木曾義仲、平氏の余党よとうを伐んとて放火ほうくわせし故、三樂四院六十坊、

世々の御璽紙ごじしまでもものこらす焼亡せしが、大悲殿井に安樂寺の」(八オ) 宝塔のみ回祿かわけろくなし、

右大將頼朝公の御治世、海野氏当山の来由を言上せしかは、大悲殿焼亡なしといへとも、

柱根摧朽ちうこんさいくの時至し故、大悲殿并諸堂社を再建し給ふ、相次て三樂寺をも再建し給ふべきを、治世

といへとも所々穩ならざれば、其聞へのみにて空しく追ぬ、其後執權しつけん北条家におゐて諸堂修補を

加へ、大悲殿を長樂寺とし、次に常樂寺、安樂寺を再建ありければ、又三樂寺鼎足ていそくのごとし、中

興別当常葉寺堅者りつしやしやうざん性しやう纂等、為結」(ハウ)縁諸人を大勸進だいくわんじんし、古いにしへに随ひ、金銀泥の一切經書写し、弘長二壬辰年、中興二世阿闍梨頼真二尊出現し給ふ坑中へ納め、石にて宝塔を再建す、かゝる有かたき靈地なれば、一たひ歩あゆみを運び、一心称名せは、大悲の御誓願ごせいぐわんのごとく、悉く厄難を除き、願として洩し給はざるものならじ、委くはしくは本記に詳つまびらかなり、」(裏表紙 見返し)

大縁日

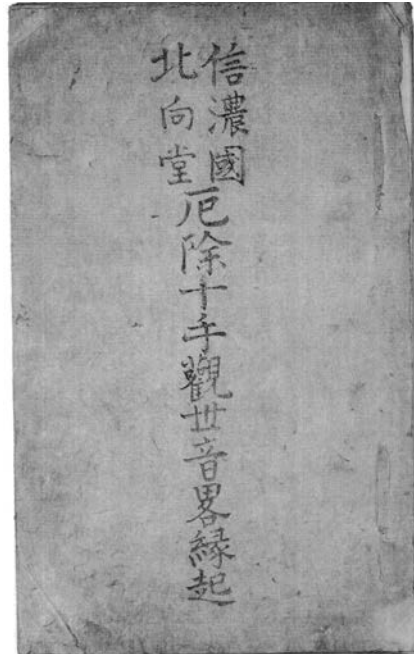
大悲尊
正月十七日 二月十七日 三月十七日
七月九日十日 八月二十三日 十月二十五日

八王子権現
四月朔日 八月二十三日

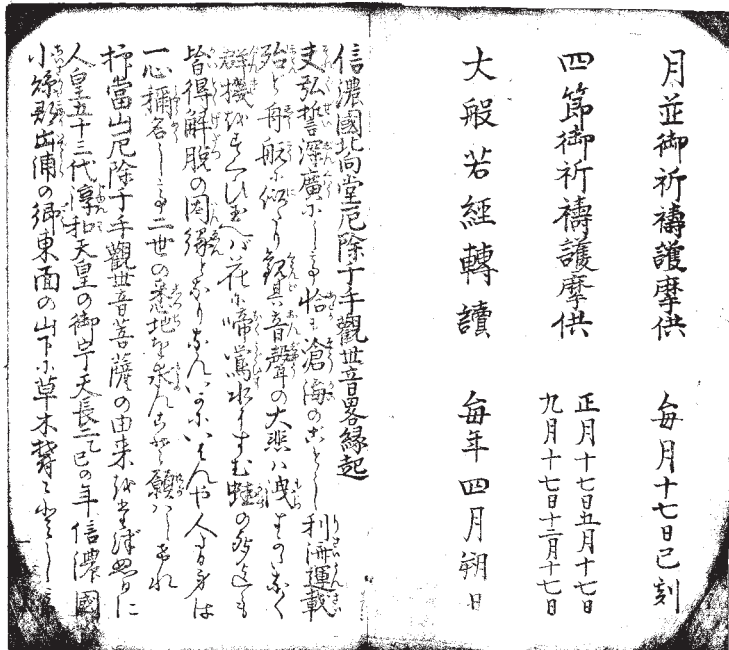
先に出す所の略縁記ありといへども、省略の多きを以て由来紛々たるゆへ、本ゑん起にしたかひ、是を正しく再板せしむるものなり、
「(裏表紙 表)

(筑波大学名誉教授・元文教大学教授)

表紙（表）



表紙（見返し）



(八丁ウ)

宝塔の圓禄

右大將賴朝の御治世海野式當山の来由を言はせ

二の火悲殿焼亡ふゝとても柱根摧朽の時とて

大慈嚴菩薩常社或再建外不知之樂寺也

再建ノ寺ヲ治メ世ヲ之ヲ所ノ授メ其ノ心ヲ

其の空に道あり其後執權北条家

大慈殿長樂寺と

以不常樂寺安樂寺以再建あり以修の又三樂寺

中興別當常樂寺アノミヤノニヤクシノ又三樂寺

中兵部掌印寺監者性善

縁法人を大勸進だいこんじん一まい古小随ひ合根泥ごせうじ一切經堂寫

弘長二壬辰年中與二世阿闍梨賴真二尊出

現
一、（内）
の石
中
二、（外）
の石
三、（内）
の石

現に中(御)石(石)く(石)癩(癩)坊(坊)に再建(再)建(建)り(再)る(再)る

有^レ手^レ靈^レ化^レる^レま^レ一^レ多^レの^レ歩^レ行^レ運^レじ^レ心^レ稱^レ名^レ也^レ

大蛇の袖言願のさしく急く厄難を除き

く 関かんのふたりのあひだに委しく本記を

裏表紙（表）

大録日

大悲尊

正月十七日	二月十七日	三月十七日
七月九日	八月十三日	十月十五日

七月九日 八月十三日 十月十五日

八王子権現

四月朔日
八月二十三日

先不出す所の畧縁記より之を省畧の要すべ
しく由來後之を以てを悪人起りたるう
是れ再拔せむと云ふものなり

卷之九